

## 都市民生常任委員会所管事務調査（行政視察）報告書

1. 視察日程 令和7年10月29日（水）

2. 調査事項
- (1) 埼玉県環境科学国際センター（加須市）  
「クビアカツヤカミキリの生態や防除等について」
  - (2) 上尾市  
「子ども・子育て支援複合施設『AGECOCO』について」

3. 参加者

委員長 中島 直樹  
副委員長 柳沢 暁  
委員 昆 佳子、川田 真也、松本 敏夫、丑久保 恒行  
随 行 岡田 光弘（議会事務局）

4. 視察内容

(1) 埼玉県環境科学国際センター（加須市）

「クビアカツヤカミキリの生態や防除等について」

- ・日時：令和7年10月29日（水） 午前9時20分～午前11時5分
- ・場所：埼玉県環境科学国際センター

### 《視察概要》

□生態について

- ・自然分布は、中国、モンゴル、朝鮮半島、ベトナムなどである。
- ・成虫は（体長25－40mm程度）、サクラ、モモ、スモモ、ウメなどのバラ樹木に産卵する。
- ・孵化した幼虫は、樹体内に食入し、生木を摂食して、フラス（糞と木くずが混ざったもの）を排出しながら、2～3年かけて終齢幼虫にまで成長し、蛹となる。なお、幼虫の活動期は主に春から秋にかけてであり、この間にフラスを排出する。
- ・蛹は6月から8月にかけて成虫に羽化し、成虫脱出孔から樹体外に脱出する。なお、埼玉県での幼虫脱出のピークは7月上旬である。
- ・メスの成虫は樹体から脱出後交尾し、幹や枝の樹皮の割れ目などに産卵する。卵は8～9日後に孵化し、生まれた幼虫は樹体内に食入する。なお、メスは、1頭あたり1000個近くの卵を産むこともある。
- ・成虫の寿命は、野外では1か月程度であり、成虫で越冬はしない。

□県内への侵入状況

- ・平成23年（2011年）深谷市で成虫（1頭）が捕獲されたが、捕獲地周辺の

被害は確認されなかった。

- ・ 県内での初めての被害は、平成25年（2013年）草加市と八潮市を流れる葛西用水沿いのサクラで確認された。翌年に八潮市のサクラで新たな被害が確認されたものの、その後しばらく被害報告はなかった。
- ・ 平成29年（2017年）になって、県南東部の越谷市、県北部の熊谷市、行田市、加須市、羽生市及び深谷市で、新たに同種の侵入・被害が確認され、急激な被害の拡大が懸念された。
- ・ 環境科学国際センターでは、県内での同種による被害の実態を明らかにするため、平成30年（2018年）から、県民参加による「クビアカツヤカミキリ発見大調査」を実施し、県内での被害状況を把握する調査を開始した。
- ・ 県内では、年々被害地域が拡大しており、令和6年（2024年）は、441か所の被害報告があった。
- ・ 県内では、報告された被害の多くがサクラだったが、モモ、スモモ、ウメなどの被害も報告されている。

#### □被害実態について

- ・ 樹体に幼虫が侵入すると、根元に大量のフラスがばらまかれ溜まる場合が多い。また、フラスは、木の葉に絡みついている場合や、幹が二つに分かれる股の部分に溜まっている場合などもある。これらのことから、フラスは、排出されたものが上から落ちてきて溜まることが多いと考えられる。
- ・ フラスが溜まっている場所の上方の幹や枝には、フラス排出孔が認められ、そこから挽き肉のようなフラスが排出される。
- ・ 1頭の幼虫による樹体の摂食範囲はかなり広く、被害は心材まで至る。
- ・ 幼虫は樹体を摂食しながらその内部で2～3年を過ごし、蛹になった後、樹体表面に開けられた成虫脱出孔から成虫となって樹体外に脱出する。1本の樹体に複数個体の幼虫が侵入・羽化すると、その内部は激しく食害を受け、地上部への水揚げなどが悪くなることから、樹体が枯死することもある。
- ・ 木を枯らさないためには、早期発見、早期防除が必要である。

#### □被害確認の方法について

- ・ フラスの確認、フラス排出孔の確認、成虫脱出孔の確認、樹体枯死の確認。
- ・ 上記の4項目を確認し、被害の程度を把握した上で防除の方法を検討する。

#### □防除の方法について

- ・ 野外で成虫を見つけたらすぐに捕殺する。
- ・ 木の根元などにフラスが確認された場合

フラス排出孔を見つけ、針金や千枚通しなどでフラスを取り除くとともに、そこから針金を挿入して幼虫を刺殺するか、登録農薬を注入して駆除する。処理後には見回りを実施し、フラスの排出がないことを確認する。フラスの排出が確認された場合は、再度、農薬を注入する。

・ 大量で大型のフラスが確認された場合

羽化時期が近づいていると考えられるため、フラス排出孔から農薬注入などを実施するとともに、成虫の拡散防止のため、羽化期前の5月下旬頃までに、樹木の幹にネットを1周から1周半程度巻き付ける。なお、ネットを巻き付ける前に、樹体の幹または幹の分枝部分に、登録農薬のバイオミサ〈カミキリ〉スリム（昆虫寄生性糸状菌製剤）を巻き付けておくと効果的である。成虫が同製剤に触れて糸状菌に感染すると、カビが生えて死に至る。ネットを巻き付けた後は、定期的に見回り、羽化した成虫がネット内にいれば捕殺する。また、ネットは、羽化期が終わった9月以降に取り外す。

・ 樹体からフラスの排出が認められた場合

フラス排出孔よりも下の根際部にドリルで穴を開け、そこから登録農薬を適量注入することで、幼虫を駆除することができる。この方法では、樹体に注入された農薬成分が蒸散流に乗り、樹体全体に拡散・浸透する仕組みになっている。幼虫は農薬成分が浸透した樹体の一部を摂食することにより駆除される。しかし、幼虫による被害が大きく、すでに樹体の一部に枯死の兆候が現れているような場合は、農薬の拡散・浸透が進まず、効果が低い可能性がある。また、心材に侵入した幼虫や孵化した個体および成虫には効果が現れないと考えられる。したがって、樹体内から羽化・脱出時期が近づいていることが推測される被害木の場合は、ネットの巻き付けとの併用を推奨する。

・ 樹体に複数のフラス排出孔や成虫脱出孔が確認され、特に枝などに枯死が確認された場合

伐採処理することが望ましい。伐採した材は、幼虫が潜んでいる可能性があるため、必ずチップ化または焼却処分する。直ちにチップ化や焼却処分ができない場合は、伐採した材をビニールシートなどで覆い、登録農薬を用いて、くん蒸処理し、材の内部にいる幼虫を死滅させる。また、残った切り株から成虫が脱出しないように、ネットを被せておくなどの処理が必要である。

・ 県内におけるクビアカツヤカミキリによる被害地域は年々拡大している。県内でのクビアカツヤカミキリの分布拡大を予測するシミュレーションモデルによると、県内のクビアカツヤカミキリは、①河川や道路沿いのサクラ並木に沿って分布拡大する可能性があること、②今後県中央部から東部にかけて分布拡大する可能性が高いことがわかった。このことから、すでに被害が発生している地域の周辺で、まだ被害が発生していない地域でも、今後成虫が飛来・産卵することにより被害が発生する可能性がある。このような成虫に対応するため、成虫発生初期（6月上中旬）と成虫発生期（7月中下旬）に、樹体全体または樹幹に登録農薬を散布する方法がある。なお、散布農薬を使用する場合は、取り扱い上の注意および「埼玉県における県有施設・樹木の消毒等に関する取組方針」に従うこと。

## 【主な質疑応答】

Q：薬剤による防除効果はあるのか。

A：樹幹散布の効果は出ていると感じている。幸手市では樹幹散布を行い、あまり被害が出ていないと聞いている。薬剤が散布できない幹の上方部分については樹幹注入を行なう。

Q：被害木の伐採後、切り株にネットを被せているのはなぜか。

A：幼虫は根っこや枝にまで入っていく。切り株から成虫が脱出しないようにネットを3年くらい被せておく必要がある。また、伐採した被害木から成虫が脱出してしまいうため、放置せず、すぐに焼却するなどの対応をしていただきたい。

Q：「神代曙」という桜は、クビアカツヤカミキリの被害に遭いにくいと聞くがどうなのか。

A：詳細な情報はない。

## (2) 上尾市

### 「子ども・子育て支援複合施設『AGECOCO』について」

- ・日時：令和7年10月29日（水） 午後1時30分～午後3時8分
- ・場所：AGECOCO（あげここ）

#### 《視察概要》

##### □施設整備に至った背景について

- ・保育課では、公立保育所2施設の老朽化の課題があった。また、子ども発達支援センターでは、つくし学園の定員超過と施設の老朽化のほか、所在地が市の北寄りであったことから、通園バスの送迎に時間がかかっていることと、相談支援・地域支援を担当するグループとつくし学園が離れた場所で、分散して業務を行っている課題があった。さらに、保育所とつくし学園の子どもたちが、日常的に交流を図り、ともに育ち合える環境を整備することにより、効率的かつ効果的な交流保育を推進させたいねらいもあった。これらのことから、4施設を統合した新たな複合施設を整備するように計画したものである。

##### □事業概要について

- ・保育所（大谷西保育所）、つくし学園（児童発達支援センター）、子ども発達センターの複合施設。複合化により、つくし学園は定員数を拡大し、保育所（大谷西保育所）では低年齢時の受入れ枠を拡大。つくし学園・子ども発達センターでは、気づきから「専門的な療育」まで切れ目のない支援を行う。また、保育所とつくし学園では、交流を通じて日々の遊びへつながるような取り組みを実施。
- ・公設公営で運営

##### □複合施設のねらい

###### ①交流保育

園庭・ラウンジを共有し、日々の保育や季節行事をを通じて交流保育を実現

###### ②医療的ケア児の受け入れ

日常的な医療的ケアを行ないながら、療育・保育を受ける体制を整備

###### ③切れ目のない発達支援

発達の特性への気づきから「専門的な療育」まで、一貫した支援が可能

###### ④地域インクルーシブの推進

地域と交流イベントを定期的で開催し、子どもたちの豊かな人間性を育む

##### □予算について

- ・建設にかかる事業費総額は約20億円
- ・財源は、国・県の補助金はなく、大部分は起債により確保

□交流保育から感じられる効果

①保育所（大谷西保育所）の子どもたち

- ・障がいがあり、装具をつけている子どもに対して、保育者が説明をすることなく、一緒に過ごす中で自然に理解し受け入れている。
- ・歩くことに時間がかかる子どもについて、共に過ごす中で理解し、待ったり、ゆずったりすることを自然に身につけられている。

②つくし学園（児童発達支援センター）の子どもたち

- ・保育所の子どもたちが遊ぶ様子を見たり、遊びを真似してみたりなど、多くの刺激をもらうことで、成長につながっている。
- ・周囲の人への関心が育ち、人を気にしたり、声をかけられたときに返事を返そうとするなど、コミュニケーションの意欲が向上している。

□今後の取り組みと課題について

- ・施設に遊びに来る親子と保育所、つくし学園に通う子どもが一緒に遊ぶ、複合施設の特徴を生かしたイベント「AGECOCOラウンジで遊ぼう！」を開催しているが、よりインクルーシブの推進を図れるよう市民への周知方法や内容の充実を図っていきたいと考えている。

**【主な質疑応答】**

Q：保育所とつくし学園が統合し複合施設となったが、保護者から複合化に対する抵抗感があったか。

A：つくし学園の保護者からは、健常児と一緒にすることに「不安」という声があった。保護者の話をよく聞き、説明会などを開催し理解してもらった。

Q：インクルーシブの推進とあるが、先生方の負担については。

A：児童や先生方に負担のない、無理のない範囲での交流を意識している。

Q：つくし学園卒園後の小学校との連携はどうなっているのか。

A：卒園後は、教育委員会と連携を図り就学支援を行なうなど、関係機関と密接な連携ができています。また、保護者からの相談については、卒園後もつくし学園やこども発達センターにおいて受けている。

Q：つくし学園の医療的ケア児の受け入れについて、受け入れないケースがあるか。

A：保護者から相談があった場合は、体調等について丁寧に聞き取りを行うなどして、受け入れている。医療的ケアについては、看護師が対応しており、症状に合わせた対応を心掛けている。

## 《委員所感》

### （中島委員長）

令和7年10月29日、都市民生委員会にて加須市の埼玉県環境科学国際センターへクビアカツヤカミキリの生態について、上尾市の子ども・子育て支援拠点複合施設AGECOCOの視察を行う。

### 埼玉県環境科学国際センター（加須市）

#### 【視察概要】

埼玉県環境科学国際センターにおいて、特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」の生態および防除策に関する視察を行った。当日は、同センターの総長にもご同席いただき、私が委員長として挨拶を申し上げた後、専門的な見地から詳細な説明を受ける。

#### 【驚異的な生命力と防除の難しさ】

今回の視察で特に衝撃を受けたのは、本種の極めて強い生命力と繁殖力だ。被害を受けた樹木を伐採したとしても、地中に残った根や切り株、あるいは放置された枝の中に卵や幼虫が潜んでいる場合、それらは死滅することなく成長を続け、やがて羽化し、再び周囲へと拡散してしまう。単に「木を切れば終わり」ではない点が、この問題の根深さである。防除に関しては、有効性が認められている注入剤や散布剤が複数存在する。しかし、幼虫は樹木の幹の中に深く入り込んで食害するため、外見からは発見が極めて困難である。排泄物（フラス）などのサインで被害に気づいた時には、すでに内部が食い荒らされ、手遅れに近い状態であることも少なくない。その結果、枯死率は非常に高く、日本の幅広い気候風土に順応できる適応力の高さも相まって、対策を困難にしている。

#### 【老木が狙われる理由】

「なぜ、樹齢の高い立派な桜ばかりが狙われるのか」という疑問についても、明確な回答を得た。その要因は「樹皮の形状」にある。若い木の樹皮はつるりとしているが、樹齢を重ねた古木は樹皮が割れてざらつき、深い溝ができる。クビアカツヤカミキリは、この樹皮の裂け目や隙間を好んで卵を産み付ける習性があるため、地域のシンボルとなるような大木ほど被害を受けやすい。

#### 【拡大する脅威と農作物への懸念】

現在、被害は日本全域には及んでおらず、一部の地域に限られているが、その生息域は年々確実に拡大している。さらに憂慮すべきは、本種が「バラ科」の樹木を好む点である。これは桜に限らず、桃や梅、スモモといった果樹も対象になることを意味する。実際に、果樹産地ではこの侵入を「死活問題」と捉え、戦々恐々としながら監視体制と備えを強化しているとのことだった。

#### 【近隣地域と本市の現状】

視察に先立ち、偶然にもNPO法人幸手権現堂桜堤保存会の会長とお話する機会を得た。県内有数の桜の名所である権現堂桜堤においてさえ、すでにクビアカツヤカミキリの侵入を許しており、定期的な薬剤注入を行うことで、なんとか被害拡大を食い止めているという切実な実情を伺った。

翻って、我が羽生市の状況は極めて深刻である。昨年、一昨年だけで市内では420本を超

える桜が伐採された。市内はすでに「壊滅状態」にあると言っても過言ではない。薬剤による防除効果はあるものの、発見の遅れやコスト、処分の難しさなど課題は山積しており、個別の対処療法だけでは追いつかないのが現実である。さらに市有地の枯死した樹木の対応を進めなければ、倒木や落枝による人的被害が懸念される。

特定外来生物を完全に駆除し、美しい桜並木を取り戻すためには、国や県、研究機関が連携し、より抜本的かつ効果的な解決策が早急に構築されることを強く期待する。

## 上尾市子ども・子育て支援複合施設「AGECOCO（あげここ）」

### 【視察報告】

#### 1. 施設概要

- ・施設名： AGECOCO（あげここ）

由来： 「上尾の子（多様性）」、「上尾の心（豊かな人間性）」、ひよこが育まれる「ここ（場所）」という意味が込められており、職員提案で名称が決定

- ・オープン： 令和5年4月1日
- ・施設構成： 以下の3施設を統合した複合施設

1. 保育所
2. 児童発達支援センター「つくし学園」
3. 発達支援相談センター

#### 2. 複合化の目的

#### 3. 複合化のメリット

「切れ目のない支援」の実現。「気づき」から「専門的な療育」までを同一施設内で行うことで、スムーズな連携が可能となるとともに、インクルーシブ保育を推進、子ども同士の関わりを通じて多様子ども・子育て支援複合施設として4施設を統合した背景には、各施設が抱えていた課題を解消し、支援体制を強化する目的があった。

まず、西上尾第一・第二保育所については、建物の老朽化が進み耐用年数が迫っていたことに加え、低年齢児保育への対応が課題となっていた。

また、児童発達支援センター（つくし学園）および発達支援相談センターでは、通園希望者の増加による定員超過や施設の老朽化に加え、所在地が市の北西部に偏っていたため、通園バスの送迎に時間を要する点も問題とされていた。

さらに、相談支援や地域支援を担う部署が複数の場所に分散していたことから、業務連携の面でも非効率さが指摘されていた。

こうした課題を一挙に解決し、より効率的で手厚い支援体制を構築するため、今回の施設統合と整備が実施された。

性を認め合う「交流保育」が実践されていた。

#### 4. 複合施設の特徴について

- ・インクルーシブ遊具を園庭に設置し、体の障害に関係なく誰もが一緒になって遊ぶことが可能。
- ・熱中症対策として、園庭にミストシャワー設置、広いベランダやウッドデッキを活用して、外遊びの代替えが可能となる。

- ・太陽光パネルの設置し、玄関ホールのモニターで発電電力の確認が可能となった。
- ・広い共有ラウンジを設け開放的

### 【所見】

少子化や核家族化が進む現代において、「孤立を防ぎ、切れ目のない支援を行うための重要なインフラ」として、子育て支援の拠点や複合化の必要性は急速に高まっている。さらに、高度経済成長期に建てられた多くの公共施設が更新時期を迎えており、人口減少社会において個別に建て替えるのではなく、集約して維持コストを下げる必要がある。効率化という行政側のメリットだけでなく、親が社会から孤立せず子育てできる環境を作ることは、結果として、少子化対策や子どもの健全育成に直結するものと考え。今回は上尾市の子育て支援、インクルーシブ保育の推進、この施設を拠点としたノーマライゼーションへの取り組みも感じることができた。複合施設ということで、床面積は広く、バリアフリー。2階建てだが、奥行きが深いエレベーターも設置されていた。インクルーシブ遊具の設置は限定的という印象をもった。

子ども同士だけでなく、保護者や地域の方々のとの交流が広がることは多様性を認め合うための貴重な場の提供にもつながるものと考え。

上尾市の人口は23万人弱。予算規模は約800億円。羽生市のそれとは大きく異なり、同様の施設を設けることは困難だが、インクルーシブ保育の推進、地域を巻き込んだノーマライゼーションへの取り組みなど、ハード面ではなく、ソフト面の構築を羽生市でももっと積極的に進めるべきと考え。

### （柳沢副委員長）

#### 1. 埼玉県環境科学国際センター（クビアカツヤカミキリの生態・防除等について）

クビアカツヤカミキリは外来種でサクラやモモなどのバラ科樹木に産卵し、孵化した幼虫は、樹体内に食入し、生木を摂食して、フラス(糞と木くずが混ざったもの)を排出しながら2～3年かけて成長し、6～8月に成虫になり樹体外に脱出します。成虫の寿命は1ヶ月程でメスは1頭あたり1000個近くの卵を幹や枝の樹皮の割目に産みます。

防除の方法は、木の根元にフラスがあったら針金や千枚通し等で幼虫を刺殺するか、薬剤を注入して駆除します。処理後に見回りを実施し、フラスの排出が無いことを確認します。また、成虫の拡散防止のため、5月下旬頃までに樹木の幹にネットを巻きつけます。

伐倒処理した場合は、伐採した材は幼虫が潜んでいる可能性があるため、チップ化や焼却処分します。また、残った切り株から成虫が脱出しないようにネットを被せます。

羽生市ではクビアカツヤカミキリの被害により昨年、一昨年で約420本のサクラを伐採しています。被害を抑制していくために薬剤等での防除や樹木の幹や切り株にネットを被せる等の対策を強化や住民への対策の周知をしていくとともに、引き続き調査、研究し、有効な対策を講じていくべきだと考えます。

#### 2. 上尾市（子ども・子育て支援複合施設「AGECOCO」について）

AGECOCOは保育所2施設の老朽化、こども発達センター・つくし学園の定員超過と施設の老朽化と相談支援を担当するグループ・発達支援相談センターが、つくし学園と

離れた場所にあることから4施設を統合した新たな複合施設を整備したものです。

建設の総事業費は約20億円、国や県からの補助金はなく、大部分は起債で確保しています。

特色は、交流保育で園庭・ラウンジを共有し、日々の保育や季節行事を通じて保育所とつくし学園の子どもたちが交流しています。保育所の子どもたちは、障がいがあり、装具をつけている子どもに対して、保育者が説明をすることなく、一緒に過ごす中で自然に理解し受け入れています。つくし学園の子どもたちは、保育所の子どもたちが遊ぶ様子を見たり、遊びを真似してみたりなど、多くの刺激をもらうことで、成長につながっています。

上尾市の人口は約23万人、羽生市の人口約5万3000人であり、上尾市は羽生市の人口の約4倍と規模が異なることから同様の施設を整備するのは難しいことから、AGECOCOの良い部分を取り入れて、羽生市に合った施設の整備を検討していくべきだと考えます。

### （昆委員）

#### 【加須市 埼玉県環境科学国際センター】

環境科学国際センターは、環境学習・試験研究・国際貢献・情報発信の4つの機能を持っており多様化する様々な環境問題に対応するため、多面的な機能を有した環境科学の総合的中核機関です。

研究員37名のうち33名の方が学位を所持しており、様々な環境研究をなされています。特に大気汚染の研究では、PM2.5などの大気中の粒子を採取したフィルターの写真が平成の始まりの頃と現在令和までのものが展示してあり、その比較をしてみると、現在のフィルターの色が平成の頃より薄くなっていることが分かります。これは大気中のPM2.5の粒子の濃度が年々下がってきているとのことで、昨今の大気汚染対策の結果の表れだと言えます。

私たち一人一人個人では小さな力かもしれませんが、温暖化対策を自分ができることを持続的に取り組むことは重要だと感じました。

館内を見学したあと、クビアカツヤカミキリの生態や被害の実態、防除の方法などを勉強いたしました。主にさくら、桃、すもも、梅などのバラ科樹木に産卵し幼虫になって樹の中に食入し、2、3年かけてさなぎになり成虫に成長。樹木から脱出するとのことです。輸入木材などから幼虫が潜んだまま国内に運ばれてきたものと考えられているそうです。埼玉県での被害は、県南東部、県北部から増え現在は37市町での拡大となっています。

羽生市ももれなくで、このクビアカツヤカミキリが原因で羽生市の桜の木、実に420本ほど伐採してしまいました。さくらは日本の象徴として長く日本人に愛されてきた花であります。全国的なさくらの壊滅は避けたいところですが、これ以上の被害が及ばないため効果的な防除対策の研究も続けられています。予期せぬ外来種対策は難しいところではありますが、羽生市もさくら以外の植物などの防除対策を強化することは自然豊かなまちづくりのためにも重要だと考えます。

#### 【上尾市 子ども・子育て支援複合施設 AGECCO】

AGECOCO（あげここ）は上尾市にある子ども・子育て支援複合施設で、市内公立保育所と児童発達支援センターつくし学園の子どもたちが交流を通じて多様性を認め合い豊かな人間性が育まれることを目的として開設されたとのこと。

市内2つの公立保育所の老朽化や増加する医療的ケア児への対応そして、発達支援センターつくし学園の老朽化などのタイミングもあり、複合施設を検討したとのこと。

その構想検討に3年、建設に2年と開設までに5年を要している。

健常児と障がい児の交流の場として整備することに様々な課題もあり、また障がいのお子様を抱える保護者の方が不安に思われていたことも多くあったようですが、当事者の子どもたちは、交流することでお互いを理解し受け入れ、また気づきの中で他者を思いやる豊かな心が育まれているとのこと。

現代またこれから先の時代は多様性、共生の時代でありますので、健常と障がいの垣根を越えて、子どもたちが思いきり交流できるインクルーシブ教育の場を設けていくことはとても重要ではないかと考えます。

また発達支援の相談センターも設置しており、障がい児を抱える保護者にもしっかりと寄り添い、様々な支援をしています。

とても配慮ある施設内で、子どもたちが心身ともにのびのびと過ごせる場であり、羽生市の保育にも取り入れていきたいと感じました。

## （川田委員）

### 1. クビアカツヤカミキリの生態・防除等について

（埼玉県環境科学国際センター（加須市））

特定外来生物クビアカツヤカミキリに関する対策の先進事例を把握するため、埼玉県環境科学センターを視察した。クビアカツヤカミキリはサクラやウメ、モモなどのバラ科樹木を加害し、樹木内部を食害することで枯死に至らせる極めて深刻な外来害虫である。埼玉県内そして羽生市でも近年急速に被害が拡大しており、公共施設の並木、市街地の公園、農地周辺における樹木の喪失が地域の景観・観光・農業に影響を及ぼしているとの説明を受けた。

センターではまず、県内市町村から寄せられる通報を基に、被害の広がりを把握するモニタリング体制を構築している。樹木周辺のフラス（木くず）や脱出孔の有無、樹皮の変色などを調査員が継続的に確認し、必要に応じて幼虫を採取して同定を行うことで、発生状況の精度を高めている。また、成虫の行動特性を調査するための実証実験を進め、発生ピークの把握や効率的な捕獲技術の確立に取り組んでいる。

防除対策については、被害木の伐倒・破砕処理が有効であるとされ、特に幼虫が木内部に潜む特性から、早期発見と迅速な伐倒が重要であるとの説明があった。破砕が困難な場合には薬剤による殺虫を行うなど、状況に応じた手法を選択している。さらに、薬剤の安全性と持続性を検証中である。

住民や事業者への啓発も重視されており、県ホームページや広報資料、SNSで識別方法や通報方法を案内しているほか、造園業者向けの講習会、学校教育との連携など、地域全体での発見体制づくりが進められている。センター職員からは、行政だけでなく住民や

民間事業者と連携した多層的な取り組みが被害拡大防止に不可欠であるとの意見が示された。

今回の視察を通じ、科学的根拠に基づく調査と、自治体・住民・事業者が連携した総合的な対策の重要性を再認識した。当自治体でも、通報体制の整備、啓発活動の強化、関係機関との情報共有の充実を進め、早期対応体制の構築を図る必要があると考える。

## 2. 子ども・子育て支援複合施設「AGECOCO」（上尾市）

少子化の進行や発達支援ニーズの増大など、全国的な課題が深刻化する中、同施設は保育と発達支援を一体化した先進的な取り組みとして注目されている。当市の今後の子育て支援施策を検討する上で参考とすべく、施設の機能、運営体制、設計思想および課題等を確認した。

AGECOCO は、公営保育所「大谷西保育所」、発達支援相談センター、児童発達支援センター「つくし学園」の三つの機能を一体化した複合施設である。これまで別々に存在していた支援機能を同一建物に集約することで、支援の連続性を確保し、子どもや保護者が必要な支援につながりやすい環境を整備した点が大きな特徴である。特に、保育所に通う中で発達面の支援が必要と判断された際、迅速に専門機関につなぐ導線が構築されていることは、従来の課題であった「保育と療育の分断」を解消するものである。

施設内部は、子どもが主体的に過ごせる空間づくりが随所に見られた。エントランスには大きな庇が設置され、天候に左右されず安全に入退館できるよう配慮されている。中心に位置する共有ラウンジは吹き抜け構造で、保育所児と発達支援児が自然に交流できる広々とした空間となっており、イベントや発表会にも活用されている。屋上には広場と庭園が整備され、活動性の確保と自然体験の場として機能している。設備面だけでなく、動線設計や素材選びなど、子どもが安心して過ごし、かつ保護者や地域が関わりやすい設計思想が感じられた。

また、同施設の重要な取り組みとして「交流保育」が挙げられる。障がいの有無にかかわらず子ども同士が同じ空間で活動し、多様性を学ぶ機会が確保されている点は、インクルーシブ教育の観点からも評価できる。発達支援相談センターでは、通所児への支援だけでなく、市内の他園への訪問支援やアドバイスも行っており、地域全体の支援力向上に寄与していることが確認できた。

一方で、課題として人的体制の確保が挙げられる。発達支援には専門職の知識と経験が不可欠であり、継続的な人材確保や研修体制の充実が求められる。また、屋上庭園や広い共有スペースを維持するための管理コスト、設備更新費など、運営面での負担を見据えた計画的運営が必要と感じた。

視察を通じ、AGECOCO は子ども・子育て支援における新たなモデルであり、保育と療育を同じ場所で行う複合化の利点が明確に示されていた。施設整備の優れた点に加え、「切れ目のない支援」「多様性を尊重する環境」「地域連携」の三つの柱がしっかりと運用に反映されている点は高く評価できる。当市においても、今後施設整備や支援体制の見直しを行う際には、ハード整備と人材育成、地域との協働を組み合わせた総合的な子育て支援モデルの構築が重要であると感じた。

## (西山委員)

### 1. 埼玉環境科学国際センター（加須市）

環境科学国際センターは、環境の保全及び創造に取り組む県民への支援や県が直面している環境問題へ対応するための試験研修、環境面での国際貢献など多面的な機能を持った新しい環境科学の総合的中核機関である。

#### 【クビアカツヤカミキリの生態・防除等について】

埼玉県では、平成23年に深谷市で雄の成虫1頭が捕獲されたが、このとき、当市での被害は確認されなかった。

ところが、平成29年になって県南東部の越谷市、県北部の熊谷市、行田市、加須市、羽生市及び深谷市で新たに同種の侵入、被害が確認され、急激な被害の拡大が懸念された。このような状況を受けて、県内での同種による被害の実態を明らかにするために平成30年から、県民参加による「クビアカツヤカミキリ発見大調査」を実施した。その結果、平成30年度は県南東部の草加市、越谷市及び八潮市、県北部の熊谷市、行田市、加須市、羽生市、深谷市の計8市で被害が報告された。

樹体に幼虫が侵入すると、根元に大量のフラスがばらまかれて溜まる場合が多い。フラスがあれば、樹体内に幼虫が侵入し生存していることを示す。木の根元などにフラスが確認された場合、フラス排出孔を見つけ、針金や千枚通しなどでフラスを取り除くとともに、そこから針金を挿入して幼虫を刺殺するか登録農薬（ロビンフット、アクセルフロアブル、園芸用キンチョールE、マツグリーン液剤2、又は、バイオセーフ）を注入して駆除する。大量で大型のフラスが確認された場合、羽化時期が近づいていると考えられるため、樹木の幹にネットを1周から1周半程度巻きつけておくと効果的である。

まだ被害が発生していない地域でも、今後成虫が飛来・産卵することにより被害が発生する可能性があるようだ。

### 2. 上尾市

#### 【子ども・子育て支援複合施設 AGE COCO】

保育所：近隣の2つの保育所の老朽化

つくし学園：施設の老朽化、入所希望者の増加への対応

発達支援相談センター：切れ目のない発達支援を行なうため、同施設内で相談から親子教室、訓練指導、つくし学園での療育までを一貫して提供し、連携をさらに強化

上記に対応するため4施設を統合し複合施設とした。

羽生市も令和7年4月に公立の第6保育所、第7保育所を閉所し、いわせ保育所を新設した。民間の保育園においても同様な保育事業を運営している。しかし、一部の施設においては、入園児獲得のために大変な思いをしているとも言われている。このため市の保育所は民間保育園等を補完する意味での運営が適切であると思う。

民間保育園等が運営しにくい「早期保育」や「延長保育」、「病児・病後児保育」、「障がい児保育」などに特化して運営し、民間との差別化を図るのが良いのではないかと考える。そうならば、共働き世帯がこれまで以上に働きやすい環境になるのではないかと考える。

## (松本委員)

### 1. 埼玉県環境科学国際センター

担当者の説明を受けたのち、研究所内にて環境学習として、子どもから大人まで楽しみながら学べる体験型展示を視察した。

センター機能として、環境科学の共有を基本理念とし、①環境学習、②環境に関する試験研究、③環境面での国際貢献、④環境情報の収集・発信、以上4つの機能を持つ大変すばらしい埼玉県環境科学国際センターの内部を視察し大変感銘した。

### 2. 子ども・子育て支援複合施設「AGECOCO」

複合施設の三つの機能として、目的は、児童の発達に関する相談に応じ、発達や行動に不安や課題のある児童を心身ともに健やかに育成する為の支援を行なっているということである。

支援方針として、①生活環境・家族の状態に合わせた支援、②行動面に不安や課題のある児童と保護者に対する専門的な支援、③関係する機関との連携による、効果的かつ適切な支援と様々な設備と保育士のすばらしい指導に感銘した。

## (丑久保委員)

### 1. クビアカツヤカミキリの生態や防除等について（於 埼玉県環境科学国際センター）

所定の時間より少し前ではありましたが、丁寧に対応していただきました。しかも、管理職の方全員の皆様が歓迎をしてくれました。まず、植松総長が歓迎の挨拶の後、スタッフを紹介、センター長・事務局長・研究企画室推進室長・研究所長などでありました。続いて、国際センターの概要は、4つの機能（環境学習・試験研究・情報発信・国際貢献）についての説明でありました。

その後、施設を案内していただきました。試験研究部門では、大気汚染について、30年前より県内の大気汚染の度合いを測定しており、測定の結果が一目でわかるような図表での説明から、環境改善に向けてしっかりと研究改善していることが理解できました。

本日の訪問の主旨は「クビアカツヤカミキリ虫」の被害状況と、防止策がメインテーマであり、担当者が詳細にわたり説明して下さりました。すでに、羽生市では管理しているサクラの木（ソメイヨシノ）の大木が400本以上浸食され、伐採されており、深刻な被害状況となっています。3月後半に開花するサクラは、市民に春の訪れと人の心を癒してくれました。しかしながら、サクラの開花を鑑賞することもできずじまいとなり、外来害虫により、市内のサクラの大木は全て消えようとしています。

令和6年度、県内44市町村931ヶ所に樹木被害とカミキリ虫の生息が確認されており、更に、被害は進むことが予測されています。カミキリ虫は、1頭で100個近い卵を産み、成虫の寿命は1ヶ月程度で、越冬はしないこともわかりました。

そこで、被害防止について説明を受けました。6月・7月上旬にサクラ・もも・スモモ・ウメ頭のバラ科樹木の大木に、薬剤や幹や根元に注入することで防除できるとのことでした。加えて、成虫を見つけ殺処分も必要で、薬剤散布等を実施することで、バラ科の大木

の保護に繋がる為、早速検討の必要性を感じました。

大きな課題と同時に、喫緊の課題でもあり、大変良い勉強となりました。

## 2. 子ども・子育て支援複合施設（AGECOCO）

上尾市の西部地域は、かつて丘陵地で山林が多く、木々が生い茂るゾーンでありましたが、新国道17号が開通し、R17号と新R17号の間に位置する地域は、市の区画整理事業がスタート、加えて、この地域内に、2つの老朽化した市立保育園・児童の療養施設・児童発達支援センターがあり、4つの施設を1つの施設にし、機能の複合化を目指したのです。また、敷地は区画整理事業により80%は市の所有となり、残り20%を購入し、建設したとのことでした。

子ども・子育て支援複合施設の名称は、公募から「上尾 AGE-O エイジゼロ」と、0歳から輝くまちと謳いました。創立当初は、増加する医療的ケア児とノーマルな児童が共に一緒の施設とのことから、利用者の保護者からは戸惑いもあったが、その弊害はいつの日か消え失せ、今日、通園の問い合わせは定員を上回る状況であるとの説明でした。

複合施設の狙いは、

1. 交流保育
2. 医療的ケア児童の受入れ
3. 切れ目のない発達支援
4. 地域インクルーシブの推進

の4つであり、子ども達の豊かな人間性を育む場となっているそうです。施設内を見学しましたが、安心・安全が保たれ、明るく充実した施設となっており、行き届いた施設となっています。

当市でも今年度当初よりスタートした「いわせ保育所」に、このような複合的要素が織り込まれていたとしたらと、改めて、様々な要因を持つ子への保育・療育の必要性、そして、公でなければできない福祉の先進的な施設設備並びに運営を感じました。

2ヶ所の施設研修をいたしました。いずれも大事な課題であり、大いに勉強になりました。